黒海北岸における細形馬面の特徴を考える

Characteristics of the Elongated Horse Frontlets of the
North Pontic Region柳 生 俊 樹^{*}
YAGYU Toshiki

ABSTRACT The aim of this paper is to analyze the characteristics of the *elongated horse frontlets* found in the North Pontic Region. The results are as follows:

1. The elongated horse frontlets can be divided into three types: 1) *Type A* is made of bronze and has a rectangular shape slightly wider in the upper part which has overhangs on either side. It belongs to the fifth and fourth centuries B.C. 2) *Type B*, whose shape is similar to Type A, has a wooden core and richly adorned gold overlay. It belongs to the fourth century B.C. 3) *Type C*, whose material is the same as Type B, takes the form of a fish. It belongs to the late fifth-fourth century B.C.
2. While Type A is of functional form and simple appearance, Types B and C are luxurious and rich in adornment. At the first stage, during the fifth century B.C., only the functional and simple Type A existed. Later, from the late fifth century B.C., luxurious Types B and C appeared and coexisted with Type A.
3. Types B and C appeared at the same time as other luxurious horse accessories, including gold and silver bridle ornaments. Such goods are often found in the huge burial mounds usually referred to as royal tombs. The appearance of the royal tombs can be explained by the growth of a stratified society in that region. Therefore, this suggests that the appearance of the luxurious and richly adorned Types B and C is connected to social change among the Scythians.
4. To grasp the position of elongated horse frontlets among the Scythians, the author considered the number of examples excavated in the North Pontic Region. The fact that the number of elongated horse frontlets is very few led the author to conclude that they were rare among the Scythians.

I. は じ め に

黒海北岸におけるスキタイ文化の墓では、しばしば馬の頭部前面（頬を除く額から鼻梁にかけての部分）を飾るための、「馬面」と呼ばれる器物が出土する。形態は様

* 金沢大学大学院博士後期課程

Ph. D. Student, Graduate School of Socio-Environmental Studies, Department of Archaeology, Kanazawa University

々であるが、そのうち頭部前面のほぼ全体を覆う細長いものを、本稿では「細形馬面 Elongated Horse Frontlet」と呼ぶ（図 1-1）。細形馬面の特徴を明らかにすることが、本稿の目的である。

黒海北岸の細形馬面について、わが国の研究者は早くから関心を寄せていた。特に、中国や西アジアの馬面との関連において、であった（江上, 水野 1935, 76；相馬 1977；巽 1995；2006）。しかし、わが国では、論述の対象となった資料もわずかなものであったし、十分な分析も行われなかった。

最も新しい巽善信の論文では、以前に比べて多くの資料を扱ったという点で進展が見られる（巽 1995, 45-46；2006, 37）。しかし、巽論文では、「北アジア」という地域概念のもとに黒海北岸と山地アルタイの資料とを一括して論じたことで、黒海北岸の細形馬面の特徴が曖昧になっている。そもそも、黒海北岸と山地アルタイは4000kmの距離を隔てており、両地域の間には大きな資料的空白もある。さらに、山地アルタイの馬面の中に、黒海北岸の細形馬面との類似を見出せるものはほとんど皆無である。中央ユーラシア草原地帯（巽の「北アジア」）の文化的一体性を考慮しても、馬面に関する限り黒海北岸と山地アルタイを合わせて論じる必要はないと考える。地域ごとの特徴を把握することが先決であり、黒海北岸のものについては、当該地域に即した分析を加える必要があろう。

このように、細形馬面を扱った先行研究には補うべき点あるいは修正すべき点がある。そこで、本稿では、できるだけ多くの資料を集めて分類・整理し、年代の変遷や黒海北岸の中での位置付けを検討しながら、その特徴をより詳しく明らかにしていく。それによって、今後の比較研究あるいは文化交流史的研究の手がかりを提供したい。

II. 黒海北岸の細形馬面

黒海北岸の細形馬面の分析に当たっては、当然、スキタイ文化の調査・研究を牽引してきたウクライナやロシアにおける成果を参照しなければならない。ところが、現地学界でも、細形馬面を詳しく扱った研究は少ないようである。⁽¹⁾発掘報告の中で類例に言及したもの（Boltrik *et al.* 1994, 154）、馬具に関する概説の中で簡単に触れたもの（Il'inskaya 1968, 122-25）、あるいは防具である馬冑との関連を説いたもの（Murzin & Chernenko 1980）がある程度である。

資料についても、19世紀末から20世紀初めに発掘された詳しい記録のないものが多いが、そうした資料の集成も行われていないのが現状である。そこで、本稿では各種論文・報告・図録などを参照して、ある程度データのそろったものを集め、分析の対象とした。

1. 型式分類

黒海北岸の細形馬面は、形態と材質を基準にすれば、以下のような3つの型式に分類できる。

A類：青銅製。形態は、両側面に張り出しを持ち、上辺が幅広い長方形を基本とする。

B類：形態はA類と同様であるが、製作技法が異なる。木地金板張、すなわち、薄い木の板を下地にして、金製の覆いを被せたものである。覆いは、周縁部が下地の裏側に折り返され、釘で固定される。通常、精緻な紋様を打ち出している。

C類：B類と同様に木地金板張であるが、形態が異なる。魚を象ったものである。

2. 資料の提示

以下、この分類案に沿って、資料を提示する。それぞれ、遺跡や出土状況の概要、形態や紋様の詳細、法量を記述する。また、墓からの出土例については、墓の年代も合わせて述べる。

A類

6遺跡出土の8点が該当する。

A1a-b. ヴォルコフツィ Volkovtsy 4号墳3号墓坑（図1-2；地図1）

概要：1889年、リンニチェンコ I.A. Linnichenko が発掘。ヴォルコフツィ4号墳には、⁽²⁾4つの墓坑があるが、そのうちの3号墓坑から、2点の同形品が出土（Il'inskaya 1968, 52）。

形態・紋様：全体として細身である。紋様はない。

法量：長さ30cm、最大幅9cm。

墓の年代：イリンスカヤ V.A. Il'inskaya は、柄鏡（*op. cit.*, Tabl. XLI-14, 17）の年代観をもとに、ヴォルコフツィ4号墳を前5世紀前半に年代付けている（*op. cit.*, 77）。

A2a-b. ヴォルコフツィ4号墳4号墓坑（図1-3；地図1）

概要：上記4つの墓坑のうち、4号墓坑からも2点の同形品が出土。墓坑の東側壁面近くで、鉄製銜・青銅製銜留・各種飾板とともに出土したという（Il'inskaya 1968, 53）。

形態・紋様：上端が丸みを帯びており、側面に切れ込みと小さな張り出しがある。裏側には20cmほどの間隔で鈕がある。表面には紋様が施されており、イリンスカヤによれば「様式化された鳥頭」である（*op. cit.*, 123）。

法量：2点とも正確な法量は不明。図版（*op. cit.*, Tabl. XLIII-3）から判断すれば、40cm弱であろう。

墓の年代：前5世紀前半（A1 参照）。

A3. セミブラーチェフ Semibrat'ev 4号墳（図1-4；地図16）

概要：セミブラーチェフ（七人兄弟）墓群は、大型墓7基と小型墓群から成る。1875-78年にティーゼンハウゼン V.G. Tiesenhausen が発掘したが、詳しい報告は公刊されていない。そのため本例についても、大型墓の1つである4号墳から出土したこと以外、詳細不明である（Murzin & Chernenko 1980, 165）。

形態・紋様：上部は破損している。中央上よりに縦方向の突帯があり、その上下両端には環状の吊手が付いている。ここに紐を通して装着したものと思われる。紋様はない。
法量：長さ41cm。

墓の年代：ここで出土したL字形の銜留具（Korovina 1957, ris. 7-1, cf. 図1-5）や、様々な器物に描写された動物紋様は、前5世紀代の特徴を示している（Aleksseev 1991, ris. 2）。また、エルミタージュ美術館に所蔵されている出土品を再検討したコロヴィナ A.K. Korovina によれば、共伴したアッティカ式黒色陶器（器種不明）は、前5世紀半ばの型式である（Korovina 1957, 179-80）。それによって、前5世紀後半に年代付けられている（*op. cit.*, 86）。

A4. ザヴァツカヤ・モギーラ Zavadskaya Mogila 1号墳（図1-5；地図8）

概要：1973年、モゾレフスキー B.N. Mozolevskij が発掘。殉葬馬坑において、馬の頭骨付近で出土。銜や銜留具も原位置に近く、馬具一式を装着した馬を殉葬したものと思われる（Mozolevskij 1980, 89-91, 93）。

形態・紋様：上端近くと中央下寄りに長方形の孔があり、ここに紐を通して装着したと考えられている。縦に小さな半球状の突起の列があるほか、周縁部にも縄目紋と小さな半球状の突起による装飾帯がある（*op. cit.*, 93）。

法量：長さ43cm，最大幅15.3cm。

墓の年代：L字形の銜留具（図1-5）や、木製容器の飾板における動物紋様（*op. cit.*, ris. 44, 47）は、前5世紀代の特徴を示している（Aleksseev 1991, ris. 2）。また、アレクセーエフ A. Yu. Aleksseev によれば、共伴したアンフォラが、断片化しているが前5世紀の第3四半世紀のものである（Aleksseev 1991, 51）。それによって、前5世紀後半に年代付けることができよう。

A5. セミブラーチェフ 6号墳（図1-6；地図16）

概要：大型墓の1つである6号墳出土。ただし、詳細不明（Murzin & Chernenko 1980,

165)。

形態・紋様：A3と同様に、中央上よりに縦方向の突帯がある。しかし、本例では吊手を欠く。紋様はない。

法量：長さ37cm。

墓の年代：コロヴィナは、共伴した赤絵式アスコスの型式によって前4世紀の第2あるいは第3四半世紀に年代付けている (Korovina 1957, 180, 186)。

A6. セミブラーチェフ小型墓群 (図1-7；地図16)

概要：小型墓群でも細形馬面が出土している (Murzin & Chernenko 1980, 165)。しかし、小型墓群の詳細は不明で、年代推定の手がかりもない (Korovina 1957, 174)。

形態・紋様：張り出しの直上から折れている。下方には鈕が残存。表面には、獣面が描写されている。

法量：残存長26cm，最大幅7cm。

B 類

5 遺跡出土の6点が該当する。

B1. ベルジャンスキー・クルガン Berdyanskij kurgan (図2-1；地図14)

概要：1977-78年，チェレドニチェンコ N.N. Cherednichenko が発掘。地表下の中央・南・東に墓葬が確認されているが，本例が出土したのは中央墓葬である。その南壁近くで発見された，2セット分の馬具（鉄製銜・青銅製銜留具・細形馬面・立飾付馬面・各種飾板から成る）を構成 (Boltrik *et al.* 1994, 144-46)。

形態・紋様：主要な図像は動物闘争紋であり，一番上にグリフィンが鹿を襲う場面，次にライオンが鹿を襲う場面，最後に走る豹が表現されている。

法量：長さ42.8cm，最大幅9.3cm。

墓の年代：多数のギリシア陶器が出土しており，そのうち，赤絵式クラテールは前4世紀の第1四半世紀であり (*op. cit.*, 146)，9点のアンフォラには前375-365年に相当する刻印があるという (*op. cit.*, 154)。それらを根拠に，前4世紀初めに年代付けられている。

B2. ポリシャヤ・ツィンバルカ Bol'shaya Tsimbalka (図2-2；地図10)

概要：1867-68年，ザベリン I.E. Zabelin が発掘したものであるが，詳しい報告がない。

6頭の馬が殉葬されていたが，そのうちの2頭に細形馬面が1点ずつ伴っていたという (Il'inskaya & Terenozhkin 1983, 149)。本例はそのうちの1点である。

形態・紋様：金製覆いのみが残存。上端に丸みを帯びた三角形の突出部があり、パルメットが表現されている。正面には、下半身が絡まりあった蛇になる女性像が表現されている。ヘロドトスの『歴史』巻四の九節にある、ヘラクレスと交わって、後にスキタイの初代の王となるスキュテスを産んだ「蛇女」に当たると考えられているものである（相馬 1977, 244-46）。

法量：長さ 41.4 cm，最大幅 12 cm。

墓の年代：出土品を再検討したアレクセーエフによれば、墳丘から検出されたアンフォラ断片の中に、前340-320年に相当する刻印のあるものが含まれていた（Aleksseev 1982, 35）。したがって、前 4 世紀後半と考えてよいであろう。

B3. トルスタヤ・モギーラ Tolstaya mogila（図 2-3；地図 7）

概要：1971年、モゾレフスキーが発掘。男性が埋葬された主体部の北東には 2 基の殉葬馬坑があり、馬具を装着した合計 6 頭の馬が殉葬されていた。本例は、このうち北側の「1 号殉葬馬坑」に殉葬された馬に伴っていた。イルカ形の飾板（後述）やヘラクレス⁽³⁾の顔を描写した円形飾板とともに出土した（Mozolevskij 1979, 32）。

形態・紋様：覆いが金ではなく銀の珍しい例である。厚さ 3 mm ほどの木製下地が残存。上端部は大きく壊れ、下端部も折れ曲がるなど、保存状態はよくない。紋様の細部は明瞭ではないが、B2 と同様の「蛇女」を描写している点が注目される（*op. cit.*, 38）。

法量：最大幅 10.6 cm。

墓の年代：アレクセーエフによれば、副葬品の内容は、ポリシャヤ・ツィンバルカのものに近い（Aleksseev 1987, 31）。したがって、ポリシャヤ・ツィンバルカと同時期、すなわち前 4 世紀後半に年代付けられる。

B4. ポリシャヤ・ツィンバルカ（図 2-4；地図 10）

概要：上述の 2 点のうちの 1 点。

形態・紋様：金製覆いのみが残存。上部には向かい合った 2 頭のライオンが、中央から下にはパルメットが三段に渡って表現されている。

法量：長さ 36.9 cm，最大幅 8.1 cm。

墓の年代：前 4 世紀後半（B2 参照）。

B5. イリンツィ Ilintsy（図 2-5；地図 2）

概要：1901-02年、ブランデンブルグ N.J. Brandenburg が発掘。ただし、詳細は不明。エルミタージュ美術館に収蔵されていたが、第二次大戦中に失われてしまったという

(Michel 1995, 170)。

形態・紋様：全体として細身である。中央のやや上よりと下端部の二箇所に、魚の鱗のようなものが表現されている。その間には、杉綾紋がある。全体としては魚を象っているのかもしれない。後述するC類に通じる要素と見るべきであろうか。なお、周縁部には多数の孔が開いているが、他の例のように折り返されていないようである。

法量：長さ38cm。

墓の年代：イリンツィでは、金製覆いを施した豪華なゴリュツスが出土している。これは、チェルトムリク Chertomlyk (Artamonov 1969, Pl. 181, 雪嶋 2008, 図62), メリトポリ Melitopol' (江上, 加藤 1992, No.39), ピャチブラーチェフ Pyat'brat'ev (江上, 加藤 1991, No.31) で出土したものと同型の、いわゆる「チェルトムリク・シリーズ」のゴリュツスの1つである (Treister 1999, 71, 雪嶋 2008, 155-56)。これらの墓は、前4世紀後半に収まるものである (Alekseev 1987, 36)。イリンツィも、同時期であろう。

B6. ヴォルコフツィ1号墳 (図2-6; 地図1)

概要：1897-98年, マザラキ S.A. Mazarakı が発掘。被葬者の右側の墓坑の東壁面近くに、面繫の保存がよい馬具が6セット残されていたが (Il'inskaya 1968, 48), その1つを構成していた。

形態・紋様：上部には人面が表現されている。中央のやや上よりと下端部には魚の鱗のようなものが表現されている。その間には、鱗のような表現がある。これらは、B5と同様に、C類に通じる要素と見るべきかもしれない。

法量：長さ38cm。

墓の年代：2点のギリシア陶器(黒色陶器)が出土している (*op. cit.*, 49, Tabl. XXXVIII-2, 3)。それらの年代観によって、前4世紀後半に年代付けられている (*op. cit.*, 79)。

C類

ここで提示できる資料は限られており、しかも若干問題のあるものも含まれるが、3遺跡出土の4点と出土地不明の1点を挙げる。⁽⁴⁾

C1a-b. ソロハ・クルガン Solokha kurgan 第一次墓葬 (図3-1, 3-2; 地図9)

概要：1912年, ヴェセロフスキー N.I. Veselovskij が発掘。ソロハ・クルガンは、最初に、中央に墓室を備えた高さ15mの墳丘が造られた(第一次墓葬)。その後、最初の墳丘の裾の部分に新たな墓室を掘り込み、さらに土盛りをして現在の高さ18mまで増築された(第二次墓葬)。細形馬面は、第一次墓葬に伴う殉葬馬坑で2点出土しており、両方とも原位置を保っていたという (Mantsevich 1987, 14)。

形態・紋様：2点とも、腹を合わせた2匹の魚を象っている。細長い体形と長く突出した吻、また硬鱗に相当すると思われる側面の紋様帯などから考えて、現在も黒海や周辺河川に生息するチョウザメ (*Huso huso*) を表現したものであろう。周縁部の一部には銀製の釘の痕跡が残る。木製の下地も一部残存 (Mantsevir 1987, 39-42)。

法量：長さ38.8cm, 最大幅8cm。

墓の年代：エルミタージュ美術館に所蔵されている出土品を再検討したマンツェヴィッチ A.P. Mantsevir は、前5世紀末から4世紀初めに年代付けている (*op. cit.*, 42, 121)。

C2. タラノヴァ・モギーラ Taranova mogila (図3-3; 地図3)

概要：1989年、フォメンコ V.N. Fomenko とエリセーエフ V.F. Eliseev が発掘したものという (Boltrik *et al.* 1994, 154)。しかし、筆者は、それ以上の詳細な情報を得ることができなかった。

形態・紋様：1匹の魚を象っている。魚はC1と同様の特徴を示しており、やはりチョウザメを表現したものであろう。部分的に木製の下地が残存 (Reeder 1999, 138)。

法量：長さ34.3cm, 最大幅5.8cm。

墓の年代：前4世紀とされるが (*loc. cit.*)、詳細不明。

C3. エルミタージュ美術館蔵品 (図3-4)

概要：出土地不明。1741年からロシア科学アカデミーが所有していたが、1859年にエルミタージュ美術館に移されたという (Rostowzew 1913, 226)。収蔵品番号 Cn 1727e/167 (Michel 1995, 167-68)。

形態・紋様：1匹のチョウザメを象っている。覆いの周囲が裏側に折り返されている。木製の下地も一部残存しており、そこには青銅製の鈕が釘打ちされている。

法量：長さ41.2cm, 最大幅6.0cm。

C4. ヴォルコフツィ1号墳 (図3-5; 地図1)

概要：1897-98年、マザラキが発掘。ここでは6セットの馬具が出土しているが (B6参照)、本例はそれらに属するものではない。イリンスカヤは、元来は別の馬具を構成していたものが紛れ込んだと推測する (Il'inskaya 1968, 125)。本例が細形馬面であるどうかは問題であるが、ここでは一応イリンスカヤの解釈にしたがっておく。

形態・紋様：一匹の魚を側面観で描写している。

法量：長さ28.4cm, 最大幅4.5cm。

墓の年代：前4世紀後半 (B6参照)。

その他（前7世紀の事例）

これまで述べてきた諸例とは形態が異なるが、コーカサス北麓のケレルメス27号墳で2点の細形馬面が出土している。20世紀初めに発掘されたもので詳細は不明であるが、殉葬された24頭の馬のうち、2頭に伴っていたものという。金製で、一方の端部が丸みを帯びた長方形を呈し、長さ34cmである（図3-6）。非常に薄いものであるため、元来は皮革あるいは木製の下地があったと考えられている。年代は、前7世紀末である⁽⁵⁾（Galanina 1997, 122, 234）。

ガラニナ L. Galanina は、先に提示した細形馬面（A類・B類・C類）の祖形と考えている（Galanina 1997, 122-24）。しかし、この例と本稿のA類・B類・C類とに共通するのは、細長いという点だけである。つながりは希薄であるように思える。したがって、本稿では、ガラニナの見解は採用せず、また分析の対象としないことにする。

III. 細形馬面の特徴と展開

次に、形態・紋様・材質といった属性や各型式の年代を考慮しながら、細形馬面の特徴と展開を考えていきたい。

1. 形態・紋様・材質に見る特徴

A類を特徴付ける形態は、これまでも指摘されているように（e.g. Murzin & Chernenko 1980, 166；巽 1995, 48；2006, 38），顔全体が細長い，額が幅広く鼻梁が狭いという馬の顔かたちに合わせたものであろう⁽⁶⁾。つまり，頭部前面のほぼ全体を覆うという目的に即した形態と考えられる。その意味で，A類の形態は，機能的と言ってよい。また，A類は，紋様の少ないものが一般的である。A2のように「様式化された鳥頭」を配したもの（図1-3）や，A6のように獣面を配したもの（図1-7）は，むしろ例外的なものであろう。したがって，A類の特徴は，機能的で簡素であると言える。

B類も，A類と同様に自然な形態を為す。しかし，A類と異なり原則として無紋のものが無い（図2）。精粗はあるが，どれも複雑な紋様が施されている。したがって，B類は，華美で装飾性が強いと言える。

一方，魚形のC類には，形態面ではA類やB類のような自然さが見受けられない。魚形であること自体に意味があるかのようである。そのような造形の意図については検討を要するが，C類は，魚を象っている点で，少なくともA類よりは装飾性が高まっていると言えよう。⁽⁷⁾

以上のことを，材質の相違と合わせてまとめると，青銅製の機能的で簡素なA類と，木地金板張の装飾的で華美なB類・C類に分けることができる。

2. 各型式の年代

では、このような相違は何を意味しているのかを考えるために、出土した墓の年代をもとに各型式の年代を見てみよう。墓の年代観については、資料目録を参照していただきたい。

A類は、早いものでは前5世紀代（A1・A2・A3・A4）の墓から出土しており、遅いものでは前4世紀代（A5）の墓から出土した例もある。したがって、A類には、前5世紀から前4世紀までの年代を与えておきたい。

B類が出土した墓は、ギリシア陶器の共伴によって年代が明瞭なものが多い。それらは、いずれも前4世紀代である。したがって、B類は、前4世紀に年代付けることができる。

C類は、例が少ないが、早い例では前5世紀末から前4世紀初めの墓から（C1）、遅いものでは前4世紀後半の墓から出土している（C4）。チョウザメを描写したC1・C2・C3は狭い範囲に限定できるかもしれないが、手がかりが乏しい。したがって、前5世紀末から前4世紀と幅広く捉えておくほかない。すなわち、若干遅るが、おおむねB類と同時期である。

以上のことから、A類が他に先行し、B類とC類が遅れる、という相対年代が明らかになる。

3. 細形馬面の展開

このように、青銅製の機能的で簡素なもの（A類）と、木地金板張の装飾的で華美なもの（B類・C類）との間には、年代差を認めることができる。したがって、黒海北岸における細形馬面の展開は、次のようになる。すなわち、1）まず、前5世紀に青銅製の機能的で簡素なものが出現し、2）前5世紀末から前4世紀初め頃、木地金板張の装飾的で華美なものが出現する、3）そして、それ以降、両者は併存するのである。

IV. 細形馬面の華美化とその背景

上述のように、前5世紀末から前4世紀初め頃、木地金板張の装飾的で華美なものが出現する。ここでは、その背景を考えてみたい。

1. 各型式の同一系統性

華美化の背景を考える前に、まず各型式の相互関連性を確認しておこう。

筆者は、A類・B類・C類が同一系統に属すると考える。それは、特定の形態の飾板との組み合わせからである。一般に、馬面は、単独ではなく、様々な飾板と組み合わせ

て用いられる（図 1-1, 1-5, 2-3, cf. 図 4）。そうした飾板の中に、ロシア語の考古学文献で“*nashchechnik*”と呼ばれるものがある。馬の頬を飾ったとされる器物である。本稿では、これを「頬飾板」と呼ぶ。細形馬面に伴う頬飾板は、原則として羽根形を基本とする形態である。

その羽根形頬飾板の典型的なものとして、A4（図 1-5）、B1（図 2-1）、B6（図 2-6）、C1a（図 3-1）、C1b（図 3-2）、C3（図 3-4）に伴ったものが挙げられる。若干の変化形もあり、例えば、B2（図 2-2）、B3（図 2-3）、B4（図 2-4）に伴ったものは、口から水流を吐き出したイルカのような海獣を象っている。また、B5 に伴ったものは三角形である（図 2-5）。しかし、これら変化形のうちでも、特に前者の場合、平面形は羽根形を模したものとなっている。羽根形のものが様式化したと見てよいであろう。

なお、材質は、共伴する細形馬面のそれに対応する。すなわち、A 類には青銅製が、B 類と C 類には木地金板張のものが伴うのである。

こうした細形馬面と羽根形頬飾板の共伴例の多さは、両者のセット関係を示している。ただし、A 類の多くのように、共伴が確認できないものもある。しかし、発掘品の全体が公刊されていないセミブラーチーフ墓群から出土したもの（A3・A5・A6）や、馬の殉葬がなく個別の馬具のみを副葬する北部森林草原地帯の例（A1a-b・A2a-b）など、馬具の組み合わせや全体像を窺うには不利な資料を含んでいるためとも考えられる。殉葬馬に装着されていた A4 には、B 類や C 類の場合と同様、羽根形頬飾板が伴っている（図 1-5）。大勢から判断して、セット関係を認めてよいであろう。

この点に注目すれば、1) 形態は類似するが材質の異なる A 類と B 類、2) 材質は同じでも形態の異なる B 類と C 類、3) 材質も形態も異なる A 類と C 類、それぞれを羽根形頬飾板との組み合わせによってつなぐことができよう。そこから、A 類・B 類・C 類は、形態や材質に相違はあっても互いに同一系統のもの、と考えるのである。

2. 前 4 世紀における馬装の華美化と細形馬面

A 類・B 類・C 類が同一系統のものであるとすれば、前 5 世紀末から前 4 世紀初め頃の B 類・C 類の出現に対して、他地域からの移入などを考える必要はないであろう。むしろ、何らかの内部的要因が関係していると考えられる。これに関連して、筆者は、前 4 世紀における馬装の華美化に注目したい。

その具体例として、まず、馬面や頬飾板などの馬頭装飾品における金銀製品の多用が挙げられる。（表 1）は、細形馬面とともに黒海北岸でしばしば用いられる「立飾付馬面」（詳細は後述）をリストアップしたものである。これを見ると、金製や銀製のものが多いことがわかる。また、この時期を特徴付ける馬の装身具として、青銅製（あるいは

は金銀製の半月形垂飾や小さな鐸を多数下げた「胸飾」がある(図4)。馬頭装飾品における金銀製品の多用とともに、馬装自体も華美なものになっている(表1)。

木地金板張の細形馬面の出現は、こうした馬装の華美化と軌を一にするものなのである。そうであれば、馬装の華美化の背景を見ることによって、木地金板張の細形馬面が出現した要因を推測することができよう。

ここで、馬装の内容と墓の規模の対応関係を見てみよう。(表2)は、時間軸を無視したものであるが、イリンスカヤとテレノシュキン A.I. Terenozhkin が作成した表(II'inskaya & Terenozhkin 1983, 123, Tabl. 2)をもとに、馬頭装飾品の材質、胸飾の有無、墳丘の高さを指標とした墓の規模の対応関係を示したものである。これを見ると、金銀製の馬頭装飾品は大規模な墓で出土することが多く、規模が小さくなるほど減少することがわかる。また、胸飾も、大規模な墓で出土する例が多い。つまり、華美な馬装は大規模な墓に特徴的と言えるのである。

墓の規模に見られる大きな格差は、前5世紀末から前4世紀の黒海北岸を特徴付けるものであり、それ以前から見られたスキタイ社会における階層分化が、さらに進行したことを示すものと見られる(林 2003, 59-62; 雪嶋 2008, 180-85)。馬装の内容にもそれが反映されているとすれば、馬装の華美化は階層分化の進行に伴った現象ということになる。以上のことから、筆者は、木地金板張の華美な細形馬面が出現する背景には、黒海北岸のスキタイ社会における階層分化の進行があったと考える。

V. 黒海北岸における細形馬面の位置

さて、これまで、細形馬面の展開やその背景を見てきた。次に、細形馬面が、黒海北岸における馬面の中でどのような位置を占めるのか検討してみたい。細形馬面とそれ以外の馬面との数量的な割合を見ることで、検討を進めていこう。

まず、馬具を装着した馬の殉葬がさかんに行われている前4世紀の事例を見る。比較対象は、板の上に立飾(多くが獣頭形)が付いた小型の馬面、すなわち「立飾付馬面⁽⁹⁾ Horse Frontlet with Sculptured Decoration」である(図5-1, 5-2, 5-3)。立飾付馬面は、殉葬馬の頭骨、特に鼻面付近で検出されることが多い。そのため、立飾の下端部に開いた孔を通して鼻革に装着されたものとみなされている(図4)。

そうした立飾付馬面や細形馬面が出土した遺跡のうち、主要な19遺跡を(表1)にまとめた。これをもとに、まず、細形馬面と立飾付馬面の出土遺跡数を比較してみると、前者が6遺跡(表1.1, 3, 6, 8, 9, 10)であるのに対して、後者は16遺跡(表1.2-5, 7-9, 11-19)を数える。次に、この19遺跡における出土点数を比較してみると、細形馬面が9点であるのに対して、立飾付馬面は57点である。出土遺跡数と出土点数から見ると、

細形馬面は、立飾付馬面に比べてかなり少ないことがわかる。

次に、同一遺跡内での割合を見てみよう。両者が共存したのは、ベルジャンスキー・クルガン、ポリシャヤ・ツィンバルカ、トルスタヤ・モギーラの3遺跡（表1.3, 8, 9）である。このうちベルジャンスキー・クルガン（表1.3）では馬具の全体像が明らかでないため、ポリシャヤ・ツィンバルカとトルスタヤ・モギーラのみを取り上げる。まず、前者では、細形馬面2点に対して立飾付馬面が4点であった（表1.8）。一方、後者では、細形馬面1点に対して立飾付馬面5点であった（表1.9）。同一遺跡内でも立飾付馬面に比べて細形馬面が少なく、一応、先の出土遺跡数と出土点数から見た結果を支持するものであろう。

さらに、次の例も参考になる。まず、7頭の殉葬馬が確認されているセミブラーチェフ6号墳では、細形馬面の出土は1点のみであった（表1.6）。また、ヴォルコフツィ1号墳では、馬の殉葬はないが、副葬された馬具の数がわかっている。すなわち、6セットの馬具が副葬されていたが、そのうちの1セットにのみ細形馬面が伴っていたのである（表1.10）。これらも、細形馬面の少なさを示すものと言えよう。

こうした例によって、前4世紀の黒海北岸では、細形馬面は数量的に多くを占めるものではないことがわかる。では、それ以前はどうであろうか。

残念ながら、前5世紀代の様相はあまり明確にできない。黒海北岸では、前5世紀の遺跡が少ないこともあって、同時期の馬具に関する知見が乏しいからである。ただし、馬の殉葬がないヴォルコフツィ4号墳（A1a-b・A2a-bが出土）の例を除いて、ある程度は窺うことができる。すなわち、4頭の馬が殉葬されたセミブラーチェフ4号墳（Korovina 1957, 179）や、3頭の馬が殉葬されたザヴァツカヤ・モギーラ1号墳（Mozolevsljij 1980, 89-96）でも、細形馬面は、それぞれ1点ずつしか出土していない（A3・A4）。これらは、細形馬面が、全ての殉葬馬に装着される標準的な器物でなかったことを示していよう。前4世紀の様相と大きく変わらないものと考えておきたい。

以上のように、細形馬面は、黒海北岸の馬頭装飾品の中では主流と言えるものではなく、むしろ特殊な位置を占めると考えられるのである。

VI. ま と め

これまでの検討結果は、以下のようにまとめることができる。

1. 材質と形態を基準にするとA類・B類・C類に分類できる。年代は、A類が前5世紀から前4世紀、B類が前4世紀、C類が前5世紀末から前4世紀、である（Ⅱ）。
2. それらは、青銅製の機能的で簡素なもの（A類）と、木地金板張の装飾的で華美なもの（B類・C類）にまとめることができる。各型式の年代観をもとにすると、1)

前者が出現するのは前5世紀であり、2) 後者は遅れて前5世紀末から前4世紀初め頃に出現する、3) そして、前4世紀代には両者が併存する、という展開を見ることができる(Ⅲ)。

3. 装飾的で華美な細形馬面(B類・C類)の出現は、内部的要因、つまりスキタイの社会において階層分化が進行したことが背景にあったと考えられる(Ⅳ)。
4. 黒海北岸には、細形馬面とは別に立飾付馬面がある。両者の数量を比較すると、立飾付馬面の方が細形馬面よりも多い。したがって、黒海北岸の馬面の主流は立飾付馬面であって、細形馬面はむしろ特殊なものと判断される(V)。

これを踏まえて、いくつかの点について述べておきたい。

まず、有機物製品の存否の問題がある。わが国では、主に木地金板張の細形馬面が対象とされ、青銅製品は知られていなかった(相馬 1977; 巽 1995; 2006)。そのため、機能的な細形馬面には、現存しない有機物製品を当てていた。さらに、それが木地金板張のものに先行する、と考えられることさえあった(巽 1995, 47, 50; 2006, 37, 43)。

有機物製品に限らず、現存しない資料を考慮しておくことは重要であろう。ただし、筆者は、黒海北岸の細形馬面に関する限り、有機物製品から木地金板張への変遷を想定することには抵抗がある。それは、まず(2)や(3)のような結果を得ているためである。また、先行研究の中で、有機物製品が金属製品に先行するという根拠が示されていないからである。もちろん、有機物製の細形馬面が存在しなかったと断言することはできない。しかし、少なくとも、実体不明の有機物製品に依存して論を組み立てることは問題であると考ええる。

次に、黒海北岸における細形馬面の位置付けの問題である。このことは、先行研究の中では全く考慮されてこなかった(相馬 1977, 248-49, 巽 1995, 45-48; 2006, 37-38)。しかし、細形馬面を地域間の文化交流を裏付ける資料としてみるときには重要な点である。他地域からの影響を想定する際にはさほど問題にならないかもしれない。しかし、逆に、他地域に対する影響を論じる際には考慮を要する。すなわち、1) そもそも少数派である黒海北岸の細形馬面が、他地域の馬面に形態変化を引き起こすような強い影響を与えることができるのかどうか、2) できるとすれば、それは一体どのような要因があるのか、を考慮しなければならないのである。月並みな言い方であるが、細形馬面が少数派である以上、相馬隆のように形態の類似だけを根拠に「黒海北岸からの影響」を言うことはできないのである(相馬 1977, 248-49)。

最後に、立飾付馬面の重要性についても述べておきたい。立飾付馬面は黒海北岸でしかんに用いられたものであるが、似たものが他地域でも知られているからである。例えば、ブルガリアのトラキア文化の墓で出土している(図5-4、古代オリエント博物館は

か 1994, Nos. 9, 17, 74, 82, 91)。さらに、相馬 (1977, 239, 243) や巽 (1995, 47; 2006, 38) も指摘したように、山地アルタイにも若干似たものがある。すでに言及されたパジリク 1 号墓の例の他 (図 5-5), 新しい資料ではウコック高原での発掘例がある (福岡市博物館ほか 2005, Nos. 39, 40, 119, 120)。こうした資料の比較によって、広域の交流が明らかになるかもしれない。いずれにしても、「馬面から見た文化交流」の研究には不可欠の資料であり、細形馬面と合わせて検討していく必要があろう。

以上、黒海北岸の細形馬面を検討することによって、これまでの知見のうちで修正すべき点や今後の方向性を示した。今後、さらに検討を重ねていきたい。

注

- (1) ベルジャンスキー・クルガンの発掘報告では、「細形馬面を伴うスキタイの馬具について」という研究 (Yu. V. Boltrik & E. E. Fialko, “Skifskie uzdechki s plastinchatymy nalobnikami,” *Tezis dokladov mezhdunarodnoj nauchnoj konferentsii posvyashchennoj pamyati A. I. Terenozhkina*, Melitopol', 1992.) が引用されている (Boltrik *et al.* 1994, 155, 文献 25)。表題から、黒海北岸の細形馬面に言及する際には無視できないものと推測される。しかし、残念ながら入手できず、未見である。
- (2) この墓のある北部森林草原地帯では、馬の殉葬がなく馬具のみが墓に納められる。
- (3) ヘロドトスが『歴史』巻四の九節で紹介しているように、ヘラクレスは、ここで出土した細形馬面に描写された「蛇女」と交わりを持つ。その点から、このような飾板の存在は興味深い。なお、同紋の細形馬面が出土したボリシャヤ・ツィンパルカにも同様の飾板があるという (Alekseev 1982, 34)。
- (4) この他に、ルーマニアのスティネチェシュティ Stinecesti における前 4 世紀末から前 3 世紀初め頃のトラコ・ゲタイ Thraco-Getae の城塞址で出土したものがある (Michel 1995, 95, Abb. 35)。黒海北岸において細形馬面とセットで用いられた羽根形頬飾板 (後述) も伴っていたようである。興味深い資料であるが、筆者の手元にはこれについての詳細な情報がないため、ここで提示することを断念せざるを得ない。
- (5) この例は、西アジアに影響を与えたスキタイの馬面に相当するかもしれない (巽 1995, 48-50; 2006, 43)。ただし、ウクライナやロシアの研究者は、逆に西アジアからの影響と考えることが多いようである (Galanina 1997, 122)。
- (6) 筆者は、試みに何頭かの馬の頭部を計測したことがある (2006 年 8 月・モンゴル国西部)。厳密なものではないが、額の上端 (前髪の生え際) から鼻先までの長さが 42-43 cm, 額の幅が 15-16 cm, 鼻梁の幅が 6-7 cm であった。本稿 A4 の法量 (長さ 43 cm・最大幅 15.3 cm) とほぼ一致している点が興味を引く。
- (7) 魚は馬の守護神である水神のシンボルであり、魚を描写した細形馬面には護符としての機能があったという見解もある (石田 1994, 61; Rostowzew 1913, 229-30)。
- (8) ロシア語の考古学文献で “nanosnik” と呼ばれるもので、より忠実に訳すならば、

「鼻飾」とすべきかもしれない。しかし、相馬や翼が馬面の一種としたことを踏まえて、「馬面」の語を含ませることにした。なお、相馬や翼の記述では、細形馬面と立飾付馬面の区別が今ひとつ明確ではない。また、両者を混同しているような場合もある（相馬 1977, 242-43; 翼 1995, 45-47; 2006, 37-38）。

(9) 筆者は、ボリシャヤ・ツィンバルカ出土の立飾付馬面の図を見ることができなかった。記述によれば、「鳥の頭を象っている」という（Il'inskaya & Terenozhkin 1983, 149）。

図版出典

図 1 : 1 (Mozolevskij 1980, ris. 35), 2 (Il'inskaya 1968, Tabl. XLIII-1), 3 (*op. cit.*, Tabl. XLIII-3), 4 (Murzin & Chernenko 1980, ris. 11-3), 5 (Mozolevskij 1980, ris. 36), 6 (Murzin & Chernenko 1980, ris. 11-2), 7 (*op. cit.*, ris. 11-1), 図 2 : 1 (江上, 加藤 1992, No. 45), 3 (Artamonov 1969, Pl. 186), 2 (Mozolevskij 1979, ris. 17, 22, 23), 4 (Artamonov 1969, Pl. 187), 5 (Michel 1995, 222, K8), 6 (Il'inskaya 1968, ris. 34), 図 3 : 1 (Mantsevich 1987, 40), 2 (*op. cit.*, 41), 3 (Reeder 1999, No. 33), 4 (Rostowzew 1913, fig. 1, 2), 5 (Il'inskaya 1968, ris. 34), 図 4 (Mozolevskij 1979, ris. 21, 132-6), 図 5 : 1 (Mozolevskij 1979, ris. 19-1), 2 (Il'inskaya & Terenozhkin 1983, 153), 3 (Artamonov 1969, fig. 126), 4 (古代オリエント博物館ほか 1994, No. 16), 5 (Rudenko 1970, Pl. 86A)

引用文献

- Alekseev, A. Yu. 1982 : "Kurgan Tsimbalka i data ego sooruzheniya," *Soobshcheniya gosudarstvennogo Ermitazha* 47, 33-35.
- Alekseev, A. Yu. 1987 : "Zametki po khronologii skifskikh stepnykh drevnostej IV v. do n. e.," *Sovetskaya Arkheologiya* 1987-3, 28-39.
- Alekseev, A. Yu. 1991 : "Khronologiya i khronografiya prichernomorskoj Skifii V v. do n. e.," *Arkheologicheskij sbornik gosudarstvennogo Ermitazha* 31, 43-56.
- Artamonov, M. I. 1969 : *The Splendor of Scythian Art: Treasures from Scythian Tombs*, New York.
- Boltrik, Yu. V. *et al.* 1994 : "Berdyanskij kurgan," *Rossiiskaya Arkheologiya* 1994-3: 140-56.
- Galanina, L. K. 1997 : *Kelermesskie kurgany: Tsarskie pogreneniya ranneskifskoj epokhi*, Stepnye narody Evrazii Tom I, Moskva.
- Il'inskaya, V. A. 1968 : *Skify dneprovskogo lesostepnogo Levoberezh'ya: Kurgany Posul'ya*, Kiev.
- Il'inskaya, V. A. & A. I. Terenozhkin 1983 : *Skifiya VII-IV vv. do n. e.*, Kiev.
- Korovina, A. K. 1957 : "K voprosu ob izuchenii semibratnikh kurganov," *Sovetskaya Arkheologiya* 1957-2: 174-87.
- Mantsevich, A. P. 1987 : *Kurgan Solokha: publikatsiya odnoj kollektzii*, Leningrad.
- Michel, S. 1995 : *Der Fisch in der skythischen Kunst: Zue Deutung skythischer Bildinhalte*,

- Europäische Hochschulschriften XXXVIII-52, Frankfurt am Main.
- Mozolevskij, B. N. 1979 : *Tovsta mogila*, Kïv.
- Mozolevskij, B. N. 1980 : “Skifskie kurgany v okrestnostyakh g. Ordzhonikize na Dnepropetrovshchine: Raskopki 1972-1975 gg.,” in A. I. Terenozhkin (ed.), *Skifiya i Kavkaz: Sbornik nauchnykh trudov*, Kiev, 70-154.
- Murzin, V. Yu. & E. V. Chernenko 1980 : “O sredstvakh zashchity boevogo konya v skifskoe vremya,” in A. I. Terenozhkin (ed.), *Skifiya i Kavkaz: Sbornik nauchnykh trudov*, Kiev, 155-67.
- Reeder, E. D. (ed.) 1999 : *Scythian Gold: Treasures from Ancient Ukraine*, New York.
- Rostowzew, M. 1913 : “Fische als Pferdeschmuck,” in *Opuscula archaeologica Oscari Montelio septuagenario dicata d. IX m. Sept. a. MCMXIII*, Stockholm, 223-31.
- Rudenko, S. I. 1970 : *Frozen Tombs of Siberia: the Pazyryk Burials of Iron Age Horsemen*, Berkley and Los Angeles.
- Treister, M. 1999 : “The Workshop of the Gorytos and Scabbard Overlays,” in E. D. Reeder (ed.), *Scythian Gold: Treasures from Ancient Ukraine*, New York, 71-81.
- 石田英一郎 1994 : 『新版・河童駒引考：比較民族学的研究』岩波文庫版（初出1966年），岩波書店。
- 江上波夫，水野清一 1935 : 『内蒙古・長城地帯』東方考古学叢刊乙種第一冊，東亜考古学会。
- 江上波夫，加藤九祚（監修） 1991 : 『南ロシア騎馬民族の遺宝展（展覧会図録）』朝日新聞社。
- 江上波夫，加藤九祚（監修） 1992 : 『スキタイ黄金美術展（展覧会図録）』日本放送協会。
- 古代オリエント博物館，日本対外文化協会（編） 1994 : 『トラキア黄金展（展覧会図録）』旭通信社。
- 相馬隆 1977 : 「楽浪出土馬面考：とくにツィンバルカ古墳出土の馬面との関連について」『流沙海西古文化論考：シルクロードの東西交流』山川出版社，231-51.
- 巽善信 1995 : 「紀元前7世紀における西アジアの馬面」『オリエント』38/2, 38-54.
- 巽善信 2006 : 「馬面から見た文化交流」『西アジア考古学』7, 35-45.
- 林俊雄 2003 : 「中央ユーラシア遊牧民の古墳から見た王権の成立と発展」初期王権研究委員会（編）『古代王権の誕生Ⅲ：中央ユーラシア・西アジア・北アフリカ編』角川書店，46-69.
- 福岡市博物館，西日本新聞社 2005 : 『アルタイの至宝展（展覧会図録）』西日本新聞社。
- 雪嶋宏一 2008 : 『スキタイ騎馬遊牧国家の歴史と考古』雄山閣。

黒海北岸遺跡地図

1. ヴォルコフツィ 2. イリンツィ 3. タラノヴァ・モギーラ 4. アレクサンドロポリ
5. クラスノクツキー・クルガン 6. チェルトムリク 7. トルスタヤ・モギーラ 8. ザヴァツカヤ・モギーラ 9. ソロハ・クルガン 10. ボリシヤ・ツィンバルカ 11. チミリョーヴァ・モギーラ 12. オグズ 13. メリトーポリ 14. ベルジャンスキー・クルガン
15. ピャチブラーチェフ 16. セミブラーチェフ 17. ケレルメス

図1 黒海北岸の細形馬面（A類）

1. 細形馬面着装図(A4) 2. ヴォルコフツィ4号墳3号墓坑(A1a) 3. ヴォルコフツィ4号墳4号墓坑(A2a) 4. セミブラーチェフ4号墳(A3) 5. ザヴァツカヤ・モギーラ1号墳(A4・馬具セット) 6. セミブラーチェフ6号墳(A5) 7. セミブラーチェフ小型墓群(A6)

1

2

3

4

5

6

図2 黒海北岸の細形馬面（B類）

1. ベルジャンスキー・クルガン (B1) 2. ボリシヤ・ツィンバルカ (B2) 3. トルスタヤ・モギーラ (B3・飾板・出土状況) 4. ボリシヤ・ツィンバルカ (B4) 5. イリンツィ (B5) 6. ヴォルコフツィ1号墳 (B6)

1

2

3

4

5

6

図3 黒海北岸の細形馬面（C類ほか）

1. ソロハ第一次墓葬北側殉葬馬(C1a) 2. 同上南側殉葬馬(C1b) 3. タラノヴァ・モギーラ(C2)
4. エルミタージュ美術館蔵品(C3) 5. ヴォルコフツィ1号墳(C4) 6. ケレルメス27号墳出土馬面と着装復元(縮尺不同)

図4 黒海北岸における前4世紀の馬装の一例
(トルスタヤ・モギーラ1号殉葬馬坑 2号殉葬馬による 縮尺不同)

図5 黒海北岸の立飾付馬面とその類例

1. トルスタヤ・モギーラ (銀) 2. チミリョーヴァ・モギーラ (金) 3. クラスノクツキー・クルガン (銀) 4. ブルガリア, ドルナ・コズニツァ (銀) 5. 山地アルタイ, パジリク1号墓 (木)

表 1. 黒海北岸の細形馬面と立飾付馬面

No.	遺 跡 名	殉葬馬 (頭)	細形馬面		立飾付馬面			その他 馬面	胸飾	墓の年代	文 献
			分類	数	金	銀	青銅				
1	ソロハ・クルガン (第一次)	2	C1a/b	2						前 5 世紀末から 4 世紀初め	Mantsevich 1987, 13-15
2	ソロハ・クルガン (第二次)	5			1	1			●	前 4 世紀初め	<i>op. cit.</i> , 26-27, 106-16
3	ベルジャンスキ・モギーラ	0	B1	1	1		?	?		前 4 世紀初め	Boltrik et al. 1994, 145
4	ガイマノヴァ・モギーラ	3					1			前 4 世紀半ば	Il'inskaya & Terenozhkin 1983, 144-45
5	セミリョーヴァ・モギーラ	10			2				●	前 4 世紀半ば	<i>op. cit.</i> , 148-49
6	セミブラーチェフ 6 号墳	7	A5	1						前 4 世紀半ば	Korovina 1957, 179
7	ソブレヴァ・モギーラ	1				1				前 4 世紀半ば	Reeder 1999, 300, 317-19
8	ポリシヤ・ツィンバルカ	6	B2/B4	2		4				前 4 世紀後半	Il'inskaya & Terenozhkin 1983, 149
9	トルスタヤ・モギーラ	6	B3	1	3	2			●	前 4 世紀後半	Mozolevskij 1979, 30-45
10	ヴォルコフツィ 1 号墳	0	B6/C4	1+1				5		前 4 世紀後半	Il'inskaya 1968, 48, ris. 28-30, 34, 36
11	コジョル	11				6	5		●	前 4 世紀後半	Il'inskaya & Terenozhkin 1983, 123
12	チェルトムリク	11				6	5		●	前 4 世紀後半	<i>op. cit.</i> , 134
13	オグズ	7?				4	3		●	前 4 世紀後半	<i>op. cit.</i> , 139
14	メリトローポリ	2					2		●	前 4 世紀後半	<i>op. cit.</i> , 148
15	モルドヴァノフ 2 号墳	1					1			前 4 世紀後半	<i>op. cit.</i> , 152
16	ストラシュナヤ・モギーラ	1					1			前 4 世紀後半	<i>op. cit.</i> , 156-58
17	レメシーフ	3				2	1		●	前 4 世紀末から 3 世紀初め	Il'inskaya & Terenozhkin 1983, 152
18	クラスノクツキ・クルガン	4					4			前 4 世紀末から 3 世紀初め	<i>op. cit.</i> , 154
19	ホミナ・モギーラ	2					1	1		前 4 世紀末から 3 世紀初め	<i>op. cit.</i> , 155-56
合 計		75		9	17	29	11	6			
					57						

表2 墳丘規模と馬頭裝飾品の材質

区分	階層	遺 跡 名	墳丘高 (m)	馬頭裝飾品			胸飾
				金	銀	青銅	
王墓	I	アレクサンドロポリ	21	■	★		◎
		オグズ	20	■	★		◎
		チェルトムリク	19	■	★		◎
		ソロハ（第二次）	18	■	★	△	◎
		ソロハ（第一次）	15	■			
		ポリシャヤ・ツィンバルカ	15	■	★	△	
		コジョル	14		★	△	◎
貴族墓	II	ジョルトカメンカ	9.5				◎
		トルスタヤ・モギーラ	8.6	■	★		◎
		クラスノクツキー	8.5		★	△	
		レメショーフ	8.5		★	△	◎
		ガイマノヴァ・モギーラ	8	■		△	
	III	バシュマチカ6号墳	7.1			△	
		ストラシュナヤ・モギーラ1号墳	7			△	
		モルドヴィノフ2号墳	6.4			△	
		メリートーポリ	6			△	◎
		チミリョーヴァ・モギーラ	5.7	■	★	△	◎
		カーメンナヤ・モギーラ	5.7			△	
		ザヴァツカヤ・モギーラ	4.5			△	
	IV	デエフ	4			△	
		ホミナ・モギーラ	3.2		★		